



退官にあたって

運動器再建医学分野・教授 金田 清志



1986年8月恩師松野誠夫教授の後任として北大医学部整形外科講座教授を拝命致しました。北大医学部同窓会新聞に教授就任挨拶のなかで、「医学部を卒業して教室に入ってこられる人達は、若いエネルギーにみちた多彩な抱負とアイデアを持ち合わせています。この人たちが裾

野の広い整形外科の知識を習得し、その基盤の上に独創性、創造性を求めて研究を進めていける環境を作っていかなばならないと思います。指導者には鋭い先見性が要求されるでしょうが、それは視野の広い学びの中で培われた事から創造的に生まれてくるのでは…。良き臨床医はヒューマニズムに徹した診療の中で学び、疑問には真剣に取り組む姿勢から育てられるでしょう。漠然とした診療の中からは何の疑問も生まれまいだろうし、疑うことから研究の糸口がつかめ、創造的仕事がスタートするはずで…」と少しえらそうなことを書いたのを覚えています。

教授在任13年8ヶ月の期間で、これらのことがどれだけ達成できたかは第三者の判断によらねばなりません。ただ動きもがいているうちに時が流れてしまったようです。

世界にcreative workを発表しよう、そしてそれを患者さんの健康回復に役立てようと教室員を励まして来ました。私たちが開発してきた胸・腰椎脊柱前方再建術でAnterior spinal instrumentation (Kaneda-SR;KASS:Kaneda anterior scoliosis system)を応用した手術方法が、世界の多くの脊椎外科専門書にとりあげられ、一つのスタンダードとして認められてきたことは、北大整形外科の研究成果が国際的に評価されたことでもあります。

こんな研究成果に対して偶然にも私の北大退官直前にアメリカ整形外科基礎学会の国際賞Steindler Awardを授与され、記念講演の機会を与えられたことでは、私と共に歩んで来てくれた教室のスタッフ、研修医、大学院生諸氏に心から感謝しています。

どんな分野でも夢を実現に結び付ける必要条件は、独創的な好奇心、勇気と自信と目標に向かった持続性ではないでしょうか。好奇心を持つことは疑問を抱かせ、何を解き明かし解決しなければならないのか可能性を導く疑問へと歩みを進めてくれます。その後は持続的行動が重要でしょう。

これから北大大学院医学研究科の21世紀を発展させて行く若き方々の創造的研究成果実現を心から期待し、長い間お世話になった北海道大学医学部に心から感謝申し上げます。(北大医学部同窓会新聞第106号より転載)

評議員就任のご挨拶

分子病理学分野・教授 吉木 敬



この4月から前任の菅野盛夫教授(現名誉教授)の後任として、評議員に就任しました。任期は2年です。評議会の構成は丹保総長以下53名で、医学部からは医学研究科長、基礎系評議員1名、臨床系評議員1名、及び病院長の計4名が評議会のメンバーです。月に1度午後3～

4時間をかけて、全学の評議事項や報告がなされます。機構上は大学の最上位の議決機関であり、その1票は重たいといえます。就任早々、北大未来戦略検討ワーキング

グループの教育研究部会のメンバーとして、大学院大学へと改組したばかりの北大の教育研究に関する近未来(2005年)と20年後(2020年)のあるべき体制について議論を重ねています。2005年の体制については重点化したばかりの大学院の教育、研究体制のメリットの促進、デメリットの解消、見直し、再改組ということになりますが、医学研究科としても現体制の見直し、再改組を考える時にきているといえます。医学研究科修士課程の設置、医学部保健学科の設置とその修士、博士課程と医学研究科修士、博士課程との連動、医学研究科の再開発なども緊急の課題です。2020年となると、その時の社会情勢、国際情勢、人口動態、国立大学の体制の変化、日本

経済の状況など種々の要因が北大の教育研究体制に影響を与えるわけで、あるべき体制をイメージすることはなかなか難しいことですが、2020年のキーワードを羅列してみると、少子化高齢化社会、生産年齢人口の大幅な減少、低経済成長、社会構造の変化、国際化、情報化社会、終身雇用制の形態の変化、就学人口の減少、国立大学の民営化、教官の任期制、大学の統廃合、大学の階層化、医師数の過剰などがあります。もう少し具体的な数字を挙げますと、日本の人口に関しては平成4年(1992年)の18歳人口は205万人、平成12年(2000年)で151万人、平成32年(2020年)には124万人に減少します。2025年には4人に1人が65歳以上、2100年には現在1億2400万人の日本人人口が6000万人強に減少するという推計もあります。一方、プロフェッショナルスクールとして、良質の医師養成を主目的としている医学部にとって医師数の増加も問題で、昭和51年(1976年)の届出医師数は134,934人(人口10万対119.3人)、平成8年(1996年)の届出医師数240,908人(人口10万対191.4人)、

平成12年(2000年)の届出医師数263,000人と急増しており、既に13,000人程度の医師過剰だとする説もあります。2020年の予測供給医師数は306,000人で約50,000人の医師過剰が予想されています。この様な現実を考えますと、医学部入学定員の削減、医学校の統廃合は必然の成り行きと思われれます。現在医学部は国立校43校、公立8校、私立29校の計80校で入学定員は7,705名となっていますが、2020年には入学定員6,000名、医学校60校程度に縮小されている可能性もあります。一般に私立は医師養成に強い熱意をもっており、その教育システムも国立を凌駕するものがあります。医学部の統廃合が国立を中心に進められることも考えておく必要があります。現在、他学部を中心に大学院大学となった北大は、最終的には学部教育を放棄せざるをえないとの意見もあり、伝統のある北大医学部もその将来像についてしっかり議論する時が来ています。皆さんの英知を集めて、21世紀の北大、北大医学研究科が発展する様に微力ながら力をつくしたいと思っています。御支援下さる様お願いします。

新任教授紹介

新任のご挨拶

老年保健医学分野・教授 玉城英彦



この度、新設されました予防医学講座老年保健医学分野教授を担当します。当分野の使命と責務の重要性を認識しており、これに応えるべく努力するつもりです。もとより浅学非才の身でありますので、ぜひ皆様がたのお力添えをお願い致します。

私は沖縄県北部の古宇利島に生まれ、北里大学、テキサス大学公衆衛生大学院、国立公衆衛生院を修了後、熊本県水俣市に新設された環境庁国立水俣病研究センターの初代疫学研究員として赴任し、水銀汚染地域住民のコホート確立をはじめとする水俣病疫学の総決算資料作成に携わりました。わが国の公害問題の原点とされる水俣病ですが、赴任当時すでに発生から四半世紀が経過し、資料散逸によって情報収集が困難となっており、大半の既存研究データも未整理のままでした。水俣における五年間は研究と行政のはざまにおいて実務としての疫学調査がいかに困難かを認識しました。

水俣以降現在に至るまでの十五年間は、スイス・ジュネーブにある世界保健機関本部(WHO)において、エイズ対策・地球環境保健対策・遠隔医療のインフラ整備など、国際行政を主体とする仕事に従事してきました。この間は、ベルリンの壁崩壊、ザイルの内紛、コソボ紛争と世界情勢が激変する中で任務を進める難しさ、楽しさを様々な局面において実感してきました。WHO在任中は世界各国で研究者や行政官らと協力して、数多くの研究やプロジェクトを遂行してきましたが、現在では

その過程で培った世界的ネットワークは私の財産です。

私の専門は疫学です。水俣やWHOにおいてその知識理論を十分に実践し、有用性を認識してきました。私なりの疫学解釈を述べさせていただくと、人間と環境の調和を目的として、社会における人の健康動態を具体的に数量化し、もって健康増進へ還元する学問といえます。ご存じのようにWHOは健康定義で、「健康とは完全な肉体的・精神のおよび社会的福祉の状態であり、単に疾病または病弱の存在しないことではない」として健康をcommunity development(健康を取り巻く要因の多様性)の中で包括的にとらえています。今回、担当する老年保健医学分野が含まれる社会医学専攻予防医学講座も改組を契機に、「環境と調和した人間社会の確立」、「変貌する環境と社会に適応したQOLの確立」を掲げており、これらは疫学的観点から見れば共通点を多く見出せる目標といえます。これらの理念をもとに北海道の公衆衛生向上に努める所存です。

高齢者の健康は、これまでの社会環境に規定された生活習慣の結晶であり、全生涯を見通した視点に立って対処すべきだと思います。わが国では介護保険法成立にも見られるように、将来の福祉先進国家へ向けての布石が進んでいます。老年保健医学分野の本来の目的は、高齢者に対する介護の質を高めることは勿論ですが、なるべく多くの方が介護フリーでcommunityの中において独立に、健康的かつ生産的な生活を営むための知識技術を社会に提供することです。

これからますます高齢化社会が進行する日本においてこの目標を達成するには情報が一つの鍵を握っています。爆発的普及をみせているインターネットに代表される近

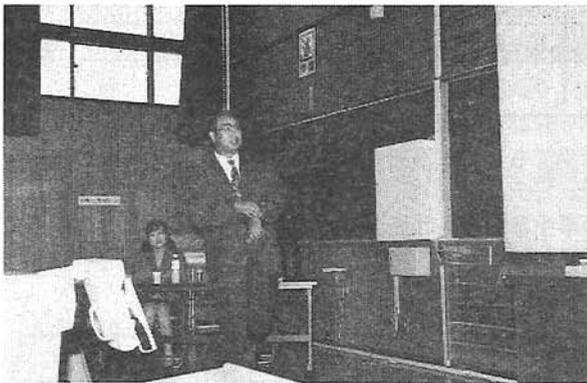
年の新たな情報通信手段は、人間活動におけるパワーの源となることでしょう。私は大学を情報拠点として考え、その情報収集力、発信力に大いに注目しております。高齢者社会において情報格差が生じないように、ともに情報を発信し、情報にアクセスできる「情報バリアフリー」の環境整備を図り、人にやさしい豊かな社会を創造し、大学が研究、教育、医療ばかりでなく福祉の一翼まで担う必要が生じてくると思います。大学の重要な社会的責務の一つは社会のニーズに応じて持続可能な生涯学習シ

ステムを確立することですが、高度情報社会の発展とともに社会医学系講座に対するこの社会的需要は今後より現実化してくると思っています。また私自身の米国や国際機関での経験を生かして、学生の国際交流や国際保健の実地研修、国際協力事業への貢献などを実現することができればという夢も持っています。

今後のご指導ご鞭撻のほどをよろしくお願いいたします。

2000年の医学展

第39回医学展実行委員会実行委員長・医学部5年 平田健司



藤堂先生の市民講演



救命救急法体験会

医学展は北大祭の医学部部門として今年で39回目となる祭典です。医学部の学生が企画・運営し、普段医学部に立ち入ることのない市民の方々にも来ていただく大きなイベントです。学生同士の連帯感を深めるだけでなく、市民の方々との交流も大きな目的の一つです。

今年の医学展は5年生（78期）の学生が実行委員会を組織し、その企画と運営を担当し、春休み前にテーマ「20世紀の医学を振り返る」を決めるところから仕事を始めました。私たちの多くは、このような大きなイベントの中核として働いた経験がなく、とまどいの毎日が続きましたが、多くの方々からのご支援・ご協力をいただきまして、無事終えることができました。

ではさっそく、6月3日（土）、4日（日）に行われたイベントを簡単にご紹介します。

「市民のための検査体験会（市民検）」は、一般の方に問診・検査を体験してもらう企画でした。医学生が事前に勉強会を開いて、問診・検査の練習をし、当日来ていただいた市民の方に被験者になっていただきました。市民の方と医学生の交流の場であり、かつ普段あまり知ることのない検査の原理なども知っていただくのが目的でした。2日間でおおよそ600名の方々にご来場いただき、たいへんな盛況でした。また市民検の一環として行われた「救命救急法体験会」では、救急医学分野の南崎先生の講義、指導の下、約40名の方が救急手技を、人形を用いて学びました。

昨年からはまった企画「実験体験会」では、障害者の

体験ができるコーナーが大盛況で、盲導犬協会に派遣していただいた盲導犬1頭のまわりには子供たちが集まり、片麻痺や妊婦の体験装具のコーナーも順番を待つ行列ができていました。また、公衆衛生学分野の方々に協力していただいた知的パズルのコーナーも数多くの人が集まり、受付終了後もコンピュータの画面に出るクイズを必死に解く小学生の姿がありました。



障害者の体験装具をつけた女の子

研究展示として、実行委員会による「新興再興感染症」、東洋医学研究会「医食同源ハーブ2000」、医療問題研究会「タイ研修報告」の3つの展示企画を行いました。このうち東洋医学研究会のコーナーでは生薬入りクッキー

の販売も行われ、漢方薬に興味をもつ市民の方々が学生に様々な質問を投げかける姿が見られました。

市民講演会として、今年は北大医学部の教授に講演していただきました。3日(土)は時間生物学分野の本間教授、消化器病態内科学分野の浅香教授に、4日(日)は移植外科学分野の藤堂教授および移植コーディネータの萩原先生にお話をいただきました。演題はそれぞれ、本間教授「体内時計と睡眠」、浅香教授「胃・十二指腸を病気にするピロリ菌とは?」、藤堂教授「臓器移植について」で、現在の最先端のトピックを基本的な部分からわかりやすく解説していただきました。藤堂先生の講演会では、予定時間を大幅に超える質疑応答が行われ、臓

器移植に対する市民の関心の高さをしみじみと感じました。

不慣れゆえに反省点も多くありますが、多くの市民の方々に来場していただき、今年の医学展も成功裏に終わることができました。医学展実行委員会を始め、多くの学生が一所懸命に取り組みました。そして、多くの方々の援助に支えられました。同窓会、学友会、そして各講座からは多くの援助をいただきました。また、教務掛の皆さんには非常にお世話になりました。そして、市民の方々無しには医学展はありえませんでした。皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

第50回医系大運動会を終えて

運動会実行委員長・医学部4年 福島 新



6月23日(金)朝10:00から本学陸上ホッケー場で、今年でちょうど50回を数える医系大運動会が行われました。好天に恵まれ、絶好の運動会日和となり、約300名の学生参加のもと開会宣言が行われ、続いて大会長井上研究科長の挨拶、医療短大森田部長の挨拶、選手宣誓の後に各種競技が一斉に始まりました。

今年は何とか医局教職員の方々のご参加を促そうと、昔懐かしいフォークダンスなどをとりいれましたが、どちらかという与学生に効果があり、医短学生、医学部学生で大変な盛り上がりを見せていました。医局教職員リレーでは、参加が3チームとやや淋しいものでしたが、生体構造解析学分野(旧第2解剖)が去年に引き続き連覇を成し遂げました。総合優勝は医学部4年中心の黄チームと医療短大看護学科1年中心の緑チームが仲良く分け合いました。運動会終了後4:30からは、中央食堂にてビアパーティーが開催され、各学年の学生がお酒を片手に親睦を深める機会となりました。また、この度は医学部同窓会からの大いなる協賛を頂き、運動会を成功させることができましたこと心より感謝申し上げます。

来年度もご協力のほど、よろしくお願い致します。

平成12年度科学研究費補助金採択状況

平成12年度の科学研究費補助金の交付がこのほどありました。

内訳は次頁表のとおりとなっています。これを11年度と比較した場合、特定領域研究(C)の新設もあり、件数では11件の大幅な増、また、交付額でも21,300千円の

増となっています。

なお、採択率は新規・継続を含み、34.7%(11年度は35.0%)で年々減少の傾向になっています。参考までに9年度分から記載しました。

科学研究費補助金採択状況(9～12年度)及び前年度比較(12年度/11年度)

金額単位：千円

| 年度別 研究種目 | 9 | | 10 | | 11 | | 12 | | 対前年度比(12年度を11年度と比して) | |
|---------------|-----|---------|-----|---------|-----|---------|-----|---------|----------------------|----------------|
| | 件数 | 配分額 | 件数 | 配分額 | 件数 | 配分額 | 件数 | 配分額 | 件数 | 配分額 |
| 地域連携推研究(2) | | | | | | | 1 | 23,800 | + 1 | + 23,800 |
| 特定領域研究(A) (1) | 2 | 21,000 | 2 | 23,700 | 1 | 22,000 | | | - 1 | - 22,000 |
| 〃 (2) | 8 | 34,300 | 8 | 41,200 | 7 | 44,700 | 4 | 8,800 | - 3 | - 35,900 |
| 特定領域研究(B) (2) | | | | | 2 | 25,900 | 3 | 38,000 | + 1 | + 12,100 |
| 特定領域研究(C) (2) | | | | | | | 8 | 36,400 | + 8 | + 36,400 |
| 基盤研究(A) (1) | 3 | 12,800 | 2 | 6,100 | | | | | | |
| 〃 (2) | 8 | 81,900 | 10 | 110,100 | 9 | 79,800 | 8 | 50,200 | - 1 | - 29,600 |
| 基盤研究(B) (1) | | | | | 1 | 5,400 | 1 | 3,700 | 0 | - 1,700 |
| 〃 (2) | 25 | 95,300 | 26 | 130,400 | 34 | 172,000 | 37 | 198,900 | + 3 | + 26,900 |
| 基盤研究(C) (2) | 26 | 40,500 | 35 | 49,000 | 31 | 41,300 | 21 | 36,500 | -10 | - 4,800 |
| 萌芽的研究 (2) | 14 | 12,600 | 14 | 13,600 | 14 | 14,500 | 18 | 19,600 | + 4 | + 5,100 |
| 奨励研究(A) (2) | 18 | 20,700 | 19 | 14,400 | 9 | 9,400 | 18 | 20,400 | + 9 | + 11,000 |
| 計 | 104 | 319,100 | 116 | 388,500 | 108 | 415,000 | 119 | 436,300 | (+11) 110% | (+21,300) 105% |

※採択率(新規・継続を含む)9年度41.1% 10年度40.4% 11年度35.0% 12年度34.7%

お知らせコーナー

哈爾濱医科大学校長ほか2名が本学部を訪問



6月21日(水)の午後、本学部と学部間協定を結んでいる哈爾濱医科大学から、金校長、林基礎医学院外語部日語教室主任及び劉国際交流センター主任が本学を訪問されました。当日は、井上研究科長、長嶋国際交流専門委員会委員長並びに高桑名誉教授と研究科長室にて、今後の両大学間の学術交流に関して活発な意見交換が行われました。

オープン・ユニバーシティについて

オープン・ユニバーシティは、本学を受験する方々への情報公開の一つとして、大学全体として企画されております。今年度の本学部の日程は、8月7日(月)午前及び午後の2回で、参加対象者を制限せず、関心のある方はどなたでも参加できます。

なお、当日参加者は、午前9時30分又は午後1時30分までに医学部正面玄関に集合することになっております。また、本学部の企画内容は、各講座等の研究室見学が主となっています。

第4回医学部学生教育ワークショップについて

第4回医学部学生教育ワークショップが、下記のとおり計画されております。多くの先生方の参加をお待ちしております。

テーマ：評価に堪えうる教育組織づくり
日 時：平成12年8月18日（金）から20日（日）
場 所：ファミリースクールひまわり（夕張市鹿ノ谷山手町18）
参加者：教授、助教授、講師、助手

医学部卒業試験日程

今年度は、6年一貫教育カリキュラムに移行してから、最初の卒業生になります。臨床実習を終了し、自主演習として学外での臨床体験を経て、医学部教育の総仕上げとしての卒業試験が、9月4日（月）～11月6日（月）の日程で実施されます。

図書 の 寄 贈

このたび、北海道大学医学部第76期卒業生一同より図書（理学療法ハンドブック外53点）をご寄贈いただきました。厚く御礼申し上げます。これらの図書は、医学部図書館2階開架閲覧室に配架しています。大いにご活用下さい。

平成13年医師国家試験出題基準

医師国家試験は、4年毎に試験内容の見直しと改善が図られております。平成13年（第95回）の試験は、この4年毎の見直しの初年となり、これまでの出題数320題から500題に変更されるなどの改正がありました。この解説書「平成13年医師国家試験出題基準」を学生貸出用に数冊購入しましたのでご利用下さい。（担当：教務掛）

◇ 編集後記 ◇

前号から編集委員となり重責に身のひきしまる思いしております。それは、一つには広報が部外者の目にも触れるからです。

そのような緊張感の中でも広報に学部内のすべての人が参加できる広場的な内容がもっと欲しいと感じています。それは教育の背景としてとくに必要だと感じているからです。

平田君や福島君の医学展、運動会の報告は大変貴重な発信です。教職員サイドもしっかりと反応すべきではと常々感じています。

医療従事者の養成はコミュニケーション能力に重点がおかれています。しかしクラブ活動など学生間での交流や教室内の懇談だけでは片手落ちでしょう。学生と教職員との交流があって始めてコミュニケーションにも社会性が備わるのではないのでしょうか。

広報がそれに役立つ場となるかは構成員一人ひとり、そして編集委員会にかかっています。重責です。（寺沢浩一）

Home Page のご案内

医学部広報は
<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html>
でご覧になることができます。

是非、ホームページ広報もご覧ください。また、ご意見ご希望などの受け付け電子メールアドレスは、
ko-ho-office@med.hokudai.ac.jp
となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科／医学部

発 行 北海道大学医学研究科広報編集委員会
060-8638 札幌市北区北15条西7丁目
連絡先 医学部庶務掛 電話 011-706-5003
編集委員 川口秀明、寺沢浩一
傳田健三、富樫廣子
佐藤松治